



九州大学2021年度公開講座 言語文化研究院主催

# ゆらぐ人間像

— 近現代における思想と芸術のダイナミズム

11月20日(土)~12月18日(土) 毎週土曜日(計5回) 14:00-16:00

**オンライン開催**

19世紀から20世紀にかけて、世界は近代から現代へと大きく変貌しました。その過程で世界観や人間像は激しく動揺し、そこで生まれた問題の多くは未解決のままです。それゆえ、当時の思想や文化を振り返ることは、私たちがいま生きている日本の現代、つまり「いま・ここ」をも考える契機となるはずです。この講座では、西欧を中心に19-20世紀に人間の身体・生命・精神等のあり方に生じた変化と芸術・文学との間に生じたダイナミックな相互作用の諸相に光を当てることで、当時の文化を新たな視点からとらえなおし、「いま・ここ」を生きる私たちの「これから」を展望します。

受講対象者 ▶ 興味のある方ならどなたでも結構です。 定員 ▶ 50名 受講料 ▶ 6,500円

申込方法 ▶ 下記のURLまたは右記のQRコードからお申し込みください。

<https://forms.office.com/r/WbKBcP91sn>

申込期間 ▶ 9月1日(水)~10月31日(日)

お申し込みいただいた連絡先に受講料の振込先、参加URL等をお知らせいたします。

お申し込みから1週間以上経っても連絡がない場合は、下記にお問い合わせください。

※個人情報 は 公開講座の運営および公開講座に関する情報の送付以外の目的には使用いたしません。

修了証書 ▶ 所定の時間数を受講された方に修了証書を授与いたします。





第1回 11月20日(土) 14:00-16:00

## 合理性からこぼれおちるものたちについて

福元 圭太

(九州大学大学院言語文化研究院 教授)

近代ヨーロッパに発した合理性の追求は、自然科学という姿で世界を席卷していきました。本来自然科学的には解明が難しいと思われるもの、例えば心や魂の問題、信仰の問題、詩文学などは、無理やり自然科学的な説明を与えられるか、自然科学の対象としては認められず、放擲されるかのいずれかでした。第1回目の講義では、これら自然科学的「合理性からこぼれおちるものたち」が、19世紀以降のドイツとオーストリアでどのように論じられたのかを考察し、あわせてその議論の日本への影響も紹介します。

第2回 11月27日(土) 14:00-16:00

## 英国と叙事詩人ホメーロス

浜本 裕美

(九州大学大学院言語文化研究院 准教授)

古代ギリシアの叙事詩人ホメーロスはトロイア戦争を題材としました。ホメーロスの詩には多くの英語訳があります。特に19世紀英国には数多くの翻訳が執筆され、ホメーロスの翻訳はどうあるべきかという論争も生まれました。翻訳されるだけでなく、劇場上演の題材ともなります。ホメーロス理解の揺れ動きには、当時確立の途上にあった文献学・考古学といった学問領域が関わっています。さまざまなホメーロスの翻訳・翻案が生まれた背景を探りながら、英国社会の動向について考えたいと思います。

第3回 12月4日(土) 14:00-16:00

## 共有される身体、つくりかえられる身体

佐藤 正則

(九州大学大学院言語文化研究院 教授)

20世紀には、科学技術と産業の発展を背景に、人間の身体を社会の共有物とみなしてコントロールしようとする施策、また身体を技術的手段によって改造しようとする実験が、政治、文化、産業、科学技術などさまざまな分野で見られました。この講義では、こうした試みが顕著であった1920年代ソ連での事例を中心にとりあげ、共有される身体、つくりかえられる身体の諸相を、政治と文化との相互作用の観点からとらえなおします。さらに、そこで生じた新たな人間観の思想的意義を、今日の視点から再検討します。

第4回 12月11日(土) 14:00-16:00

## 出来事は誰が語りうるか — 原爆文学を巡る問題

永川 とも子

(九州大学大学院言語文化研究院 助教)

「ヒロシマ・ナガサキ」という出来事は、被爆者の証言を主たる物語とし、それに依拠して語り継がれてきました。一方で欧米圏の言語空間では近年、加害/被害の構図を攪乱し、語りの「当事者性」自体を問題領域とするような実験的テキストも登場しています。1990年代、アメリカの文壇にセンセーショナルな問題を投げかけた「アラキ・ヤスサダ事件」を手掛かりに、ある出来事の「当事者」ではない者は、如何にして出来事を語りうるのだろうかという問題に迫ります。

第5回 12月18日(土) 14:00-16:00

## 《関係性》からみる文学

佐藤 典子

(九州大学大学院言語文化研究院 准教授)

現代芸術において、作品と鑑賞者との関係はもはや一方通行ではありません。わたしたちが作品を鑑賞することなしには完成しない作品が、20世紀以降現在に至るまで、いくつもあらわれています。つまり現代芸術を考えると、こうした《関係性》を無視することはできないのです。では、文学においてはどうでしょう。書物に印刷された文字は、わたしたち読者なしに芸術として成り立つでしょうか。そのとき、それらの文字を記した作者の立場はどうなるのでしょうか。みなさんと一緒に考えていきます。